

夫<sup>それ</sup>無始の生死を留めて、此の度<sup>たびけつじょう</sup>決定して無上<sup>ぼだい</sup>菩提を証せんと思はゞ、すべからく衆生本有の妙理を觀ずべし。衆生本有の妙理とは妙法蓮華經是なり。故に妙法蓮華經と唱へたてまつれば、衆生本有の妙理を觀するにてあるなり。文理<sup>もんり</sup>真正の經王なれば文字即実相なり、実相即妙法なり。唯所詮一心法界の旨を説き顯はすを妙法と名づく、故に此の經を諸仏の智慧とは云ふなり。一心法界の旨とは十界三千の依<sup>え</sup>正・色心・非情草木・虚空刹土<sup>こくうせつど</sup>いづれも除かず、ちりも残らず、一念の心に収めて、此の一念の心法界<sup>へんまん</sup>に遍満するを指して万法とは云ふなり。此の理を覺知するを一心法界とも云ふなるべし。但し妙法蓮華經と唱へ持つと云ふとも、若し己心の外に法ありと思はゞ全く妙法にあらず、麁法なり。麁法は今經にあらず、今經にあらざれば方便<sup>ごんもん</sup>なり、權門なり、方便權門の教ならば、成仏の直道にあらず。成仏の直道にあらざれば、多生曠劫<sup>たしやうこうごう</sup>の修行を経て成仏すべき故に、一生成仏叶ひがたし。故に妙法と唱へ蓮華と読まん時は、我が一念を指して、妙法蓮華經と名づくるぞと、深く信心<sup>お</sup>を發<sup>すべ</sup>こすべきなり。都て一代八万の聖教、三世十方の諸仏菩薩も我が心の外に有りとは、ゆめゆめ思ふべからず。然れば仏教を習ふといへども、心性を觀ぜざれば全く生死を離るゝ事なきなり。若し心外に道を求めて万行万善を修せんは、譬へば貧窮<sup>びんく</sup>の人、日夜に隣の財<sup>たから</sup>を計<sup>かぞ</sup>へたれども、半銭の得分もなきが如し。然れば天台の釈の中には「若し心を觀ぜざれば重罪滅せず」とて、若し心を觀ぜざれば、無量の苦行となると判ぜり。故にかくの如きの人をば仏法を学して外道となると恥しめられたり。爰を以て止觀には「仏教を学すと雖も還つて外見に同ず」と釈せり。然る間<sup>あいだ</sup>仏の名を唱へ、經卷をよみ、華を散らし、香をひねるまでも、皆我が一念に納めたる功德善根なりと信心を取るべきなり。之に依つて浄名經の中には諸仏の解脱を衆生の心行に求めば、衆生即菩提<sup>ぼだい</sup>なり生死即涅槃<sup>ねはん</sup>なりと明かせり。又衆生の心けがられば土もけがれ、心清ければ土も清しとて、浄土と云ひ穢土と云ふも土に二つの隔てなし。只我等が心の善悪によると見えたり。衆生と云ふも仏と云ふも亦此くの如し。迷ふ時は衆生と名づけ、悟る時をば仏と名づけたり。譬へば閻鏡<sup>あんきやう</sup>も磨きぬれば玉と見ゆるが如し。只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。是を磨かば必ず法性<sup>ほっしょうしん</sup>真如の明鏡と成るべし。深く信心<sup>お</sup>を發<sup>おこた</sup>こして、日夜朝暮に又懈<sup>い</sup>らず磨くべし。何様にしてか磨くべき、只南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを、是をみがくと云ふなり。

抑<sup>そもそも</sup>妙とは何と云ふ心ぞや。只我が一念の心不思議なる処を妙とは云ふなり。不思議とは心も及ばず語も及ばずと云ふ事なり。然ればすなはち起こるところの一念の心を尋ね見れば、有りと云はんとすれば色も質<sup>いろ</sup>もなし。又無しと云はんとすれば様々に心起こる。有<sup>う</sup>と思ふべきに非ず、無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず、有無の二の心も及ばず。有無に非ずして、而も有無<sup>へん</sup>に遍して、中道一実の妙体にして不思議なる

を妙とは名づくるなり。此の妙なる心を名づけて法とも云ふなり。此の法門の不思議をあらはすに、譬へを事法にかたどりて蓮華と名づく。一心を妙と知りぬれば、亦転じて余心をも妙法と知る処を妙経とは云ふなり。然ればすなはち、善悪に付いて起こり起こる処の念心の当体を指して、是妙法の体と説き宣べたる経王なれば、成仏の直道とは云ふなり。此の旨を深く信じて妙法蓮華経と唱へば、一生成仏更に疑ひあるべからず。故に経文には「我が滅度の後に於て<sup>まさ</sup>に<sup>こ</sup>斯の経を受持すべし。是の人仏道に於て決定して疑ひ有ること無けん」とのべ給へり。<sup>ゆめゆめ</sup> <sup>ふしん</sup> 努々不審をなすべからず。穴賢穴賢。一生成仏の信心。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

日 蓮 花 押